

アフリカと「アフリカの独立」に関する報道と理解(2)

川 端 正 久

9 1953年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

1月8日 与謝野秀駐エジプト公使は信任状を提出した(朝)。2月4日 エジプト綿花使節団が来日した(朝・毎)。2月14日 浅尾新甫団長(中(近)東友好通商使節団)はエジプトのファウジ外相と会談した(朝)。2月21日 初代駐日エジプト公使にオスマン・エベイドが任命された(朝)。2月25日 通産省はエジプト綿を輸入すると発表した(毎)。3月1日 林寿郎「カバ君もの申す」(朝)。3月3-4日 小林秀雄「エジプト紀行(上・下)」(朝)。3月17日 帰国した浅尾新甫団長は「輸出にエジプト有望」と発言した(朝)。4月1日 戦後初の輸出物産見本市船美代玉丸がアフリカ・南米に向けて神戸を出港した(毎)。5月8日 黄金海岸のオベデマ貿易商業相は日本商品の輸入を制限すると言明した(朝)。9月26日 上田特派員(帰国後)報告「アフリカのはなし」(朝)。9月27日 上田秀夫報告「新しいアフリカ①」(朝)；続②9月28日、③9月30日、④10月1日、⑤10月2日。10月10日「ラゴス(アフリカ黄金海岸)領事」(ママ *)に青木ヤスハルが任命された(毎)。[* 1953年7月25日、「在ラゴス日本国領事館」は「英領ナイジェリア ラゴス」に設置された]。10月31日 日本・エジプト通商決済協定が調印された(朝)。11月20日 エジプト通商使節

団が来日した（毎）。11月30日 日本・エジプト貿易支払協定が調印された（朝）。12月3日 エジプト通商使節団は財界人と懇談した（朝・毎）。12月5日 談話「進む日・エジプト経済提携 ファハミ使節団長語る」（毎）。

アフリカと世界

3月28日 リビア王国はアラブ連盟の加盟国になった（朝）。4月9日 アジア・アラブ・ブロック代表部はチュニジア・モロッコ問題を国連安保理に提出すると発表した（朝）。7月30日 英国リビア条約が調印された（朝）。8月18日 リビア政府は英国リビア廿カ年友好同盟条約を承認した（朝）。8月26日 国連安保理はモロッコ問題の討議を開始した（毎）。9月3日 国連安保理はモロッコ問題を議題とする提案を否決した（朝・毎）。9月16日 国連総会運営委員会はモロッコ問題を議題にする提案を採択した（朝）。9月17日 国連総会は南アフリカの人種差別政策を議題にする提案を決定した（朝）。10月7日 国連政治安全保障委員会はモロッコ問題とチュニジア問題の討議を開始した（朝・毎）。10月9日 アジア・アラブ13カ国はモロッコに5年以内に独立を与える決議案で一致した（朝）。10月21日 チュニジア問題の5項目提案が国連政治安全保障委員会に提出された（朝）。10月26日 国連政治安全保障委員会は即時独立案を否決しチュニジア独立勧告修正決議案を採択した（朝・毎）。11月3日 国連総会はモロッコ決議案を否決した（朝・毎）。11月11日 国連総会はチュニジア決議案を否決した（毎）。11月23日 国連信託統治委員会は英仏領トーゴランドを統合する決議案を採択した（毎）。11月28日 国連総会は南西アフリカの国連信託統治化を南アフリカ連邦に要請した（朝）。12月4日 国連信託統治委員会は前伊領ソマリーランドの独立促進決議案を採択した（毎）。

北アフリカ

エジプト

1月13日 ナギブ首相は憲法草案起草委員会（憲法委員会）委員を任命

した（朝）。1月15日 枝松特派員（ロンドン）報告「英・エ関係再び悪化 エジプト・スーダン協定で」（毎）。1月16日 ナギブ首相は全政党の解散を指令した（朝・毎）。1月17日 ナセル大佐は共産主義者の逮捕を開始したと発表した（朝）。ナギブ首相の特別大権が半年間延長された（朝）。1月20日 エジプト政府は全政党事務所を閉鎖した（朝）。1月23日 ナギブ首相は国民組織「解放戦線」の結成を宣言した（朝・毎）。全労働組合は解放戦線に参加するために解散を決定した（朝・毎）。1月31日 解放戦線綱領はナイル全流域からの外国軍の撤退を要求した（朝）。2月10日 エジプト政府は軍事評議会が最高統治機関であると声明した（朝）。ナギブ將軍は総司令官の権限（独裁権）を握った（毎）。3月1日 枝松特派員（ロンドン）報告「スエズ運河の運命かけて 注目の英・エジプト会談」（毎）。3月14日 ナギブ首相とエジプト駐在英国大使はスエズ地帯の英軍撤退交渉を開始した（朝）。3月18日 憲法委員会は検討を開始した（毎）。3月24日 マヘル前首相（憲法委員会委員長）は立憲共和制を検討中と言明した（朝）。4月5日 エジプト政府は戒厳令を一年延長した（毎）。4月25日 横川特派員（ロンドン）報告「妥協なるか英・エ会談 相譲らぬ“スエズ撤兵”」（毎）。4月27日 英エ会談が開始された（朝・毎）。4月29日 エジプト議会憲法起草委員会は共和制採用を決定した（朝）。5月5日 憲法委員会は新憲法草案作成に同意した（朝）。共和制が決定された（毎）。5月14日 エジプト政府はスエズ地区で英軍を経済封鎖（食糧供給停止）することを決定した（朝）。5月15日 英軍はカイロ・スエズ道路を遮断した（朝・毎）。英軍兵士六百人がポートサイドに上陸した（毎）。5月23日 憲法委員会はエジプト共和制宣言を可決した（毎）。6月18日 ナギブ首相は共和制を宣言し、初代大統領に就任した（朝）。王族一家の称号は剝奪された（毎）。6月20日 解説「内外に難題控う ナギブ新大統領今後の課題」（朝）。7月13日 エジプト全土に警戒態勢が布かれた（毎）。英軍戦車隊がイスマイリヤを封鎖した（毎）。上田特派員（カイロ）報告「海外市

場を見る エジプト」(朝)。7月14日 解説「またも危機! 英・エ関係」(朝)。7月21日 上田特派員(カイロ) 報告「エジプトの印象 米資本、黙々と進出」(朝)。8月7日 松尾特派員(カイロ) 報告「特派員の手帳 首都に熱狂的群衆」(朝)。8月11日 英軍とエジプト人がポートサイドで衝突し死傷者が出た(朝・毎)。8月17日 松尾特派員(カイロ) 報告「海外市場を見る エジプト第一の紡績工場を訪ねて」(朝)。9月15日 ナギブ首相は革命裁判所を設置すると発表した(朝・毎)。カイロに非常事態が宣言された(毎)。11月8日 革命委員会は王室財産の没収を命令した(朝)。

[スーダン]

1月10日 スーダンの四大政党代表とエジプト特使は対英政策で協定に調印した(毎)。1月11日 英国とエジプトはスーダン自治問題で交渉を再開した(朝・毎)。2月12日 英国のイーデン外相は英エ協定が調印されたと発表した(朝)。2月13日 森特派員(ロンドン) 報告「英国・エジプトスーダン協定の意義」(朝)。2月19日 椎野特派員(ロンドン) 報告「“独立”の解釈で食違い スーダン問題 英・エジプト間に」(朝)。3月10日 ナギブ首相はスーダンの取り扱いが不当と英国を非難した(毎)。3月21日 スーダン総督は自治(憲)法に署名した(朝)。5月6日 スーダン選挙管理委員会は議会選挙の実施を10月に延期すると決定した(朝)。11月2日 総選挙(独立か統合か)が開始された(朝・毎)。11月29日 エジプトとの統合を支持する親エジプト派の国家統一党が優勢と伝えられた(朝)。12月11日 国家統一党が勝利した(毎)。

[チュニジア]

5月2日 チャードリ・カスタ(ル)リ(チュニス市長)が暗殺された(朝・毎)。民族主義者は抗議のゼネストを呼び掛けた(朝)。5月3日 地方選挙が実施された(毎)。6月1日 チュニジア首長の後継者(嗣子)アッゼディン・ベイが射殺された(朝・毎)。9月2日 フランス政府は(龍法 '18) 51-4. 340 (2654)

オートクローク総督を解任しヴォアザールをチュニジア総督に任命した（朝・毎）。

〔モロッコ〕

5月29日 地元酋長（土侯）は連名でユーセフ・モロッコ首長の罷免を要求する請願書をフランス政府に提出した（毎）。8月14日 親仏派土侯はユーセフ首長の退位を要求した（毎）。8月15日 仏人警官2名がマラケシュで刺殺された（朝）。ユーセフ支持者、反仏民族主義者が活動した（毎）。8月16日 モロッコ全土が緊迫した（毎）。8月17日 解説「紛糾するモロッコの政情 アラブ民族主義の反発」（毎）。8月20日 フランス政府はユーセフ首長に国外退去を命令した（毎）。8月21日 後任の首長にムーレイ・アラファが就任した（朝・毎）。サルタン（土侯）が大検挙され各地で流血騒ぎが発生した（朝）。8月22日 アラファ首長はフランスとの友好関係を継続すると宣言した（朝・毎）。板倉特派員（パリ）報告「解決未だしモロッコ紛争 仏、かえって苦境へ」（毎）。

東アフリカ

エチオピア

8月14日 上田特派員（アジスアベバ）報告「海外市場を見る エチオピア」（朝）。

〔ケニア〕

3月9日 モウモウ団11名が射殺された（朝）。3月26日 モウモウ団による襲撃事件で二百人が死亡した（朝・毎）。3月31日 英国の増援軍がナイロビに到着した（朝）。4月3日 ケニア・アフリカ同盟のムランビ書記長は人種差別の撤廃と自治権の獲得について国連に提訴することを決意した（朝）。4月10日 森特派員（ロンドン）報告「英の東アフリカ政策に危機」（朝）。4月24日 ケニア政府はナイロビ市を特別地区に指定した（朝）。7月15日 最高裁判所はケニア・アフリカ同盟前総裁ジョモ・ケンヤッタ等6名の判決を破棄した（朝）。8月2日 上田特派員（ナイロビ）報告「ケ

ニヤ便り」(朝)。

[ウガンダ]

11月30日 英国政府は保護領ウガンダのブガンダ王ムテサ二世を廃位・追放し、非常事態を宣言した(朝・毎)。

中部アフリカ

[コンゴ]

9月7日 上田特派員(レオポルドヴィル)報告「ベルギー領コンゴを訪ねる」(朝)。

南部アフリカ

[中央アフリカ連邦]

1月30日 中央アフリカ連邦結成会議は白書最終案に調印した(毎)。2月5日 中央アフリカ連邦白書は「中央アフリカ連邦」議会の創設を提案した(朝)。解説「中央アフリカ連邦の構想」(朝)。2月10日 森特派員(ロンドン)報告「「中央アフリカ連邦」をめぐる動き 激化する人種対立」(朝)。3月24日 英国議会下院は中央アフリカ連邦統合案を可決した(毎)。4月9日 中央アフリカ連邦案について南ローデシアで住民投票(有権者はほとんど白人)が実施された(朝・毎)。4月10日 連邦案に賛成が大勢となった(朝・毎)。4月12日 M「「中央アフリカ連邦」の創設 英の経済困難打開」(毎)。4月14日 森特派員(ロンドン)報告「「中央アフリカ連邦」の行手」(朝)。5月23日 英国植民局(植民地省)スポークスマンは英領ニヤサランドで反乱が発生したと発言した(毎)。7月27日 英国議会下院は中央アフリカ連邦結成案を可決した(毎)。9月7日 ゴッドフリー・ハギンス南ローデシア首相は中央アフリカ連邦臨時政府首相に就任した(朝)。

南アフリカ連邦

1月18日 マラン首相は「最終的に共和国を宣言する」と発言した(朝)。1月28日 マラン首相は非常大権を要求した(朝)。4月15日 総選挙が開

始された（朝）。4月17日 森特派員（ロンドン）報告「露骨な人種的偏見
南ア連邦選挙の背景」（朝）。与党の国民党が総選挙で勝利した（朝・毎）。
4月18日 解説「人種抗争激化せん」（毎）。森特派員（ロンドン）報告
「人種問題、解決遠のく」（朝）。4月20日 アフリカ人国民会議派（アフリ
カ民族会議）のルスーリ総裁はマラン政権の人種差別政策に抵抗すると宣
言した（朝）。8月19日 上田特派員（ヨハネスブルグ）報告「特派員の手
帳 日本商社員が柔道指南」（朝）。9月1日 上田特派員（ヨハネスブル
グ）報告「海外市場を見る 南ア連邦」（朝）。

1-2 報道と解説

スーダンは英国とエジプトが2月12日にスーダン協定に調印した結果、
自治から独立へ大きく始動した。「英国・エジプト スーダン協定成立の
意義 [ロンドン＝森特派員13日発] この協定の結果、スーダンは直ちに
自治政府を組織できることとなり、三年以内には自決権行使により完全独
立か、エジプトとの合同か、それとも英連邦の一員となるか三つの道を選
び得ることとなった」（朝、2月14日）。

ケニアのマウマウ運動は内戦の様相を呈し、英国のアフリカ政策は危機
に直面していた。ジョモ・ケニヤッタとマウマウの関係が解説された。
「英の東アフリカ政策に危機 [ロンドン＝森特派員8日発] ケンヤッタは
59歳。アフリカ人の政事（治）結社ケニヤ・アフリカ同盟の元委員長であ
る。…キクユ族の研究家として名のあるリーキー博士—白人宣教師の息子
でキクユの間で育ったという—によると、事件の背景を大要次のように説
明している。…戦後世界の民族主義の流れに乗ってケニヤ・アフリカ同盟
が設置され、ケンヤッタは委員長になった。ケニヤ・アフリカ同盟はケニ
ヤ中央協会を吸収したものとされている。そしてモウモウ団—1948年ご
ろに生まれたものと信ぜられる—はケニヤ・アフリカ同盟とも密接なつな
がりのあるものと当局ではみている」（朝、4月10日）。

「中央アフリカ連邦」(ローデシア・ニアサランド連邦)が成立した。これはイギリス植民地主義(白人支配)の強引な押し付け政策であり、実際には、アフリカ人の民族主義を掻き立てることになった。「中央アフリカ連邦」の行手 [ロンドン=森特派員12日発] 中央アフリカ連邦案は元来三地域の白人在住者を団結することによって人種的優位を確保するとともに…経済的単一体を作ってニアサランドの労働力と農業資源、南北ローデシアの鉱山資源を結合」(朝、4月14日)することであった。「M「中央アフリカ連邦」の創設 アフリカ開発事業の成否はまず原住民の協力を得ることが第一だということを骨の髄まで体得したはずの英国が敢て原住民はじめ民族主義にもえ上るアフリカ人の猛烈な反対を押切って創設するこの連邦をいかに育ててゆくか。…今生れようとしている“中央アフリカ連邦”の生立ちにはいくたの苦難が待ちもうけている」(毎、4月12日)。

上田秀夫(朝日新聞経済部員)はアフリカの実情を現地から報告した。朝日新聞社は海外市場視察を目的として特派員を東南アジア・中東・アフリカに派遣した。朝日新聞のアフリカ移動特派員の第一号となった上田は、1953年6月17日に日本を出発し8月までアフリカ11カ国・都市(エジプト、エチオピア、ケニア、南ア連邦、ベルギー領コンゴ、黄金海岸、ナイゼリア、象牙海岸、フリータウン、ガンビア、ダカール)を訪問・視察し、報告(13本)を掲載した。上田の業績について、後輩の萩森健一(1960年のアフリカ特派員)は「七年も前にあれだけの記事を書くのは、大変だったろう」(『思い出の上田秀夫』小峯書店、1977年5月、207頁)と評価した。上田は帰国報告「アフリカのはなし」においてアフリカの現実を次のように記述した。「アフリカといえば、どこへ行ってもジャングルで、ゴリラや、ライオンなどの猛獣が、わがもの顔をしているなどと、考える人があるかもしれません。とんでもない話です。…黒人も高い教養を身につけています。ナイゼリアなどのイギリスの植民地も、ちゃくちゃくと、独立の準備をすすめ、高いていどの自治をかちとっています。黄金海岸の総理大

臣は黒人です」(朝、9月26日)。最後の上田報告「新しいアフリカ⑤ 高まる民族意識」は民族主義の高揚と独立の準備を紹介し、「一層民族意識を強め独立への自信を高めている」(朝、10月2日)と強調した。ただし残念なことはベルギーの植民地政策を美化しすぎたことである。「ベルギー領コンゴでは、人種的差別などというヘマをやらないばかりか、銅山の黒人労働者に対して、八時間労働制という近代的な制度を与えている。もっとも、コンゴで、こんな進歩的な制度を思い切って実施できるのは、ここの開発がユニオン・ミニエールという国策会社の財閥会社の手に握られているからでもある」(朝、9月28日)。案内された国策会社の外側にある、植民地支配の過酷な現場は見せてもらえなかったからであろうか。

映画では「キリマンジャロの雪」(原作＝ヘミングウェイ、主演＝グレゴリー・ペック)が1953年1月に上映された。その他、「スーダンの砦」「蛮地の太陽」「砂漠の決斗」「ターザンの憤激」が公開された。

2-1 論文と著書

論文

井上勇「英領ケニアのマウマウ團 民族闘争から階級闘争への発展」『世界週報』33巻36号・34巻1号、1953年1月、54-55頁。冠郁夫「目ざめるアメ(フ)リカ大陸＝西欧の植民地体制をゆさぶる＝」『新しい学校』5巻1号、1953年1月、50-51頁。パーム・ダット「残忍な独裁政権にうらぎられた国民——ナギブ新しい仲間をつくる——」『世界情勢旬報』184号、1953年1月、39-46頁。「中東・アフリカの民族運動」『世界』85号、1953年1月、60-63頁。「ナイジェリア商相の訪欧印象記」『輸出綿糸布月報』3巻1号、1953年1月、33-34頁。原子林二郎「全政党の解散命令」『時事通信時事解説版』2160号、1953年1月、1頁。「アフリカの輸出入業者(一・二・三)」『海外貿易情報』38号、1953年2月、22頁；39号、1953年3月、22頁；40号、1953年4月、22-23頁。「エジプトの商業會議所(略)」『南阿連

邦の商業會議所（略）」日本商工會議所編『商工會議所要覧 1953年版』1953年2月、246-256頁。岡倉古志郎「中東・北アフリカの民族解放運動」宮川実・柳田謙十郎編『社会科学基礎講座 第一巻』青木書店、1953年2月、145-154頁。「在エジプト公使館」「在プレトリア総領事館」外務省『職員録 昭和二十八年二月一日現在』外務大臣官房人事課、1953年2月、62-63頁。東商調査部「援助より輸入を 工業化進む南阿連邦」『東商』69号、1953年2月、18-19頁。西澤恭三郎「白領コンゴ随想」『輸出綿糸布月報』3巻2号、1953年2月、5頁。橋本「ウガンダ（Uganda）経済事情」『経済調査』（大和銀総合研究所）61号、1953年2月、27-31頁。ジョセフ・ダー・ハبيب「革命後の埃及」；山邊義昭「英領東阿の日本品輸入停止事情」『海外貿易情報』38号、1953年2月、14-15頁；17頁。柳沢英二郎「エジプトの民族運動」『法政論集』2巻1号、1953年2月、61-92頁。「アフリカめぐり」別技篤彦『世界の旅』金子書房、1953年3月、211-241頁。今泉篤男「私の美術紀行 2 エジプトの絵」『美術手帖』66号、1953年3月、29-31頁。宇尾野久「エジプト農業のギリシャ化に對する通説への反省（M.シェネーベルのパピルス研究を中心として）」『三田學會雜誌』46巻3号、1953年3月、42-53頁。「エジプトの経済、貿易概観」『海外経済事情』119号、1953年3月、14-15頁。「エジプトの土地改革」『ILO時報』5巻2-3号、1953年3月、33-37頁。河島理一郎「黒人藝術 ニグロの作品」『婦人之友』47巻3号、1953年3月、1-2頁。南平正治「エジプトの原棉問題と綿製品事情」『大阪貿易館報』1953年3月、5-6頁。林壽郎「新世界旅ある記＜アフリカ＞ 暗黒大陸の昔と今」『改造』34巻3号、1953年3月、149-151頁。「アフリカに生れた自由国 エリトリア」『世界文化』1巻1号、1953年4月、22-25頁。小幡操「暗黒大陸のめざめ」；丸山静雄「戦略的にみた北アフリカ」；アンドリュウ・ロス「マウ・マウ團と日本」；渡邊誠毅「「ジャングルの平和」と戦略資源」『世界』88号、1953年4月、148-158頁；164-168頁；138-142頁；159-164頁。マルコム・ジョンソン「アフリカを震撼させ

るマウ・マウ闘争」『中央公論』68巻4号、1953年4月、142-151頁。西澤恭三郎「黎明近づく白領コンゴ」；安川貞治「南阿三題」『輸出綿糸布月報』3巻4号、1953年4月、15-17頁；18-21頁。ジョセフ・デー・ハビブ「エジプト貿易雑信」『海外貿易情報』40号、1953年4月、21頁。林昂「エジプト大學學生の頃」『中央公論』68巻4号、1953年4月、224-229頁。堀義明「暁の暗黒大陸縦断——黑人王國アフリカの怒りの表情——」『文藝春秋』31巻6号、1953年4月、138-149頁。「燃え盛るフリカ民族運動」「アフリカに移る冷戦の舞台」須磨彌吉郎『スターリンの碑銘』日本経済新聞社、1953年4月、189-193、253-256頁。「アフリカから中欧まで」武者小路公共『冷戦立見席』講談社、1953年5月、17-36頁。「アフリカ大陸の曙」都留重人『パイプの煙』勁草書房、1953年5月、208-210頁。「イギリスとアフリカ」『東京銀行月報』5巻5号、1953年5月、2頁。「エジプトの新鉱業法」『内外石油情報』63号、1953年5月、23-25頁。「エリトリア問題」（を含む7項目）外務省国際連合局『国際連合第七総会の事業（第一部）』外務省国際連合局、1953年5月、19-23、66頁。菊島富男「主要国における経済・貿易の動向について 第一篇 スターリング地域 英領植民地」『外国為替』72号、1953年5月、17-20頁。倉松功「南アフリカの人種問題とキリスト教會」『福音と世界』8巻5号、1953年5月、38-43頁。小山いと子他「共同研究 世界の争点 第五回 モロッコ」『中央公論』68巻5号、1953年5月、118-129頁。坂本徳松「アフリカもの語り」『東邦経済』24巻5号、1953年5月、38-42頁；（続）24巻7号、1953年7月、26-27頁。「中東・北アフリカをめぐる諸問題」『世界の情勢 新版』毎日新聞社、1953年5月、185-205頁。徳永博「主要国における経済・貿易の動向について 第一篇 スターリング地域 南ア連邦」『外国為替』71号、1953年5月、19-21頁。中谷三郎「英領西アフリカの経済開発と輸出品販売機構について」『貿易界』47号、1953年5月、11-14、5頁。渡辺武男「アフリカに旅して」『婦人之友』47巻5号、1953年5月、12-14頁。浅尾新甫「中近東通商使節より歸りて」『自

警』35巻6号、1953年6月、16-21頁。「英領西アフリカ事情」『海外経済事情』126号、1953年6月、13-14頁。太下金二郎（紹介）A.B.モントジョイ「エジプト工業の発達」『人文地理』5巻2号、1953年6月、52-54頁。「危機に立つスエズ基地」『ダイヤモンド』41巻21号、1953年6月、106-107頁。在プレトリア日本総領事館「南阿連邦の経済状況」『経済と外交』120号、1953年6月15日、11-13頁。在プレトリア日本総領事館「南阿連邦経済情勢（一九五二年度）」『経済と外交』122号、1953年6月29日、12-16頁。染織文化研究會（明石国助編、明石染人（国助の号）解説）『埃及コプト染織圖録』（第1輯～第16輯）京都書院、1953年6月～1954年12月。森永和彦「強まるか・エジプトの発言力 “共和制”採用の意義と背景」『時事通信 時事解説版』2293号、1953年6月、2-4頁。山邊義昭「東アフリカに於ける邦品販路開拓の一般問題」『海外貿易情報』42号、1953年6月、15-16頁。ベイヤード・ラスティン「アフリカ革命の物語」『世界國家』7巻6号、1953年6月、28-31頁。「エチオピアの女子教育」『婦人と年少者』1巻4号、1953年7月、30頁。（紹介）外国政治研究所編「北アフリカの工業化」『世界週報』34巻21号、1953年7月、68頁。外務省経済局第四課「南阿綿工業の概況について」『経済と外交』123号、1953年7月、3-5頁。「スウェーズ運河の活動現況」『海外経済事情』128号、1953年7月、11-12頁。玉井菊雄「南阿羊毛の印象」『繊維月報』10巻7号、1953年7月、6-8頁。地理學特設調査室「エジプト地理學の近況」『地理學』1巻6号、1953年7月、46-47頁。富村傳「埃及學の發展とその課題」『古代學』2巻3号、1953年7月、206-213頁。宮野昇太郎「三つのアフリカ問題——中央アフリカ連邦結成とその背景——」；宮野昇太郎・浅田尚子「同——南阿連邦の総選挙——」；宮野昇太郎「同——ケニアとマウマウ団について——」『経済人』7巻7号、1953年7月、80-84頁；7巻8号、1953年8月、69-74頁；7巻9号、1953年9月、60-63頁。「エジプトにおける産業勞使関係」『ILO時報』5巻7-8号、1953年8月、51-58頁。川喜田愛郎「ピラミッドの蔭で」『世界』92号、1953年8月、

42-46頁。ジョン・ガンサー「サハラ沙漠を行く」『リーダーズ・ダイジェスト』8巻9号、1953年8月、105-111頁。（紹介）サタデイ・レビュー＝ライフ「アフリカ特集號」『世界週報』34巻22号、1953年8月、68頁。村山三郎「エジプトの貿易」『大阪貿易館報』1953年8月、23-26頁。矢嶋仁吉（紹介）ブカ（ナ）ン「ニジェリア——英國植民地の最大の名残り——」『地理學研究』26巻8号、1953年8月、376-377頁。安川貞治「最近の白領コンゴウ事情」『輸出綿糸布月報』3巻8号、1953年8月、32-39頁。「エリトリア經濟事情」『海外經濟事情』132号、1953年9月、9-10頁。甲斐靜馬「中近東・アフリカの民族運動とヨーロッパ」『中央公論』68巻10号、1953年9月、301-305頁。桑原信「エジプトの図書館」『讀書春秋』4巻9号、1953年9月、11頁。田中寿「エジプトの無拠出年金制度」『社会保険時報』27巻8・9号、1953年9月、11-15頁。通産省通商局通商調査課「在外公館の調査報告」『貿易界』51号、1953年9月、6-13頁。富村伝「Pharaohに関する若干の考察」『史峯』1巻1号、1953年9月、2-6頁。日本紡績協會調査部「綿製品市場めぐり（その一）英領東阿——ケニア、ウガンダ、タンガニイカ及びザンジバル——」『日本紡績月報』81号、1953年9月、27-39頁；（續）82号、1953年10月、38-44頁。吉阪俊藏「南アフリカ連邦の卷」『日勞研資料』6巻37号、1953年9月、22-24頁。蠟山芳郎「植民地ナショナリズムと反帝國主義」；坂本徳松「アフリカのナショナリズム」『二つの世界 現代史講座 IV』創文社、1953年9月、97-112頁；202-209頁。浅井順一「アフリカ市場について（スターリング地域）」『化纖月報』10号、1953年10月、32-35頁。「英領中央アフリカの經濟事情」『海外經濟事情』133号、1953年10月、14-15頁。「エジプト」『新地理』2巻1号、1953年10月、58-65頁。「熱帯および南アフリカ」（他）ソヴィエット同盟科学アカデミー歴史学研究所（園部四郎訳）『植民地・從属国の歴史（I）』三一書房、1953年10月、105-117、225-269頁。樋口清（紹介）マックスウエル・フライ「黄金海岸における学校建設計画」『国際建築』20巻10号、1953年10月、3-10頁。

前田陽一「思出のモロッコ」『中央公論』68巻11号、1953年10月、213-223頁。渡邊紳一郎「ピラミッド綺譚」『オール讀物』8巻10号、1953年10月、82-87頁。「アフリカの悲劇」中村浩『恐るべき飢餓』みすず書房、1953年11月、182-197頁。上田秀夫「日本を知らず日本も知らぬ □アフリカー周旅行雜觀□」『世界週報』34巻32号、1953年11月、36-37頁。上田秀夫「輸出市場としてアフリカは有望か」『實業之日本』56巻26号、1953年11月、32-35頁。「黄金海岸に於ける日本品の輸入」（他）『海外貿易情報』47号、1953年11月、15、17、19頁。「北アフリカの諸人種」「サハラ以南のアフリカ」アンリ＝V.ヴァロア（寺田和夫譯）『人種』白水社、1953年11月、39-44、49-63頁。鈴木雅也「アテナイのエジプト遠征及びその敗戦に於ける年代的考察」『關西學院史學』Ⅱ、1953年11月、43-65頁。「チュニジア国民のただしい民族的要求を實現するために」『第三回世界労働組合大会宣言・議事録』五月書房、1953年11月、300頁。「ナイルをさぐるブルース——暗黒の大陸アフリカの光明——」野間三郎『世界探検ものがたり』毎日新聞社、1953年11月、114-139頁。日本紡績協會調査部「綿製品市場めぐり（その二）英領西阿——ナイジェリア、ゴールド・コースト、シエラ・レオネ及びガンビア——」『日本紡績月報』83号、1953年11月、28-40頁；（續）84号、1953年12月、52-64頁。火野葦平「税金のない國モロッコ——アラビアン・ナイトの世界——」『文藝春秋』31巻16号、1953年11月、148-152頁。「佛領西アフリカの經濟事情」『海外經濟事情』136号、1953年11月、12-14頁。「英領東阿の貿易概況——在ナイロビ日本領事館——」『經濟と外交』148号、1953年12月、8-13頁。「エジプトの農地改革」『エコノミスト』31巻50号、1953年12月、48-49頁。小林貞一「アトラス山系の地質瞥見」『地學雜誌』62巻4号、1953年12月、25-29頁。小林秀雄「ギリシャ・エズプト寫真紀行」『藝術新潮』4巻12号、1953年12月、109-124頁。「チュニスの經濟事情」『海外經濟事情』138号、1953年12月、11-12頁。「弗地域よりの輸入制限撤廢に関する南阿蔵相・經濟相の声明要旨——在

プレトリア日本総領事館——』『経済と外交』147号、1953年12月、12-13頁。「熱帯および南アフリカ」（他）ソヴィエツ同盟科学アカデミー歴史学研究所（園部四郎訳）『植民地・従属国の歴史（Ⅱ）』三一書房、1953年12月、457-477、595-672頁。二塚「白領コンゴ市場の紹介」『呉羽紡績月報』48号、1953年12月、27-33、45頁。

著書

「ソマリアの暫定的管理をイタリアに移譲することに関する…連合王国とイタリア政府との間の交換公文」（を含む4協定）『条約集 第31集』外務省条約局、1953年（3月）。藤岡謙二郎編『アフリカ・オセアニア・兩極地方』（人文地理學會、世界地誌叢書 V）柳原書店、1953年4月。外務省条約局第四課「エジプト駐留の外国軍隊に対する刑事裁判管轄権に関する制度」外務省条約局、1953年8月。東洋紡績株式會社經濟研究所編『南阿連邦に於ける綿業保護政策』（東洋紡績研究所『調査資料』14号）、1953年8月。世界文化画報社（村田貞蔵編）『アフリカ編』（世界大観 第一卷第八集）世界文化画報社、1953年9月。平凡社編『世界美術全集 4 古代エジプト』平凡社、1953年9月。山川惣治『少年ケニヤ』（第1卷～第13卷）産業經濟新聞社、1953年7月～1955年11月。金田鬼一編『アフリカ昔話 まほうのふえ』講談社、1953年12月。

2-2 文献と概説

日本のアフリカ外交の拠点は在エジプト公使（大使）館と在プレトリア総領事館に置かれていた。外務省『職員録 昭和二十八年二月一日現在』によれば、在エジプト公使館職員は特命全權公使＝与謝野秀、一等書記官＝田村秀治、外交官補＝杉谷好一、在プレトリア総領事館職員は領事＝吉岡俊夫、副領事＝藤田保二、三等理事官＝寺田喜市であった。与謝野秀は与謝野鉄幹・晶子の二男として1904年に生まれ、東京帝国大学法学部卒業後、1928年に外務省に入省した。1952年11月3日の日本・エジプト国交回

復を受け、エジプト公使（1952年12月28日から1954年3月31日まで）を、1954年4月13日の大使館昇格を受け、エジプト大使（1954年4月13日から1956年3月2日まで）を務めた。「初代公使にはブリュッセルの在外事務所長から在ベルギー大使館参事官となっておられた与謝野秀さんが起用」（田村秀治『アラブ外交55年 上 友好ひとすじに』1983年3月、135頁）された。外務省は中近東通商使節団を1953年2-3月に派遣した。団長は浅尾新甫（日本郵船社長）、団員は外務省事務官2名、通産・大蔵両省からそれぞれ1名、民間から江商の駒村であった（浅尾新甫『激動期の海運』日本海事新聞社、1963年10月、57頁）。使節団は6カ国（エジプト、レバノン、シリア、イラク、イラン、トルコ）を訪問し、とくにエジプトとの通商の進展を評価した。浅井順一（外務省経済局第四課）「アフリカ市場について」がある。戦前の外交官、武者小路公共の『冷戦立見席』（1953年）は「セラッシー国王殿下」との会見、日本とエチオピアの修好条約の締結（1927年）を回顧した（19頁）。戦前の外交官、須磨彌吉郎は『スターリンの碑銘』（1953年4月）において、1936年にモンバサを訪問したことを回顧し、マウマウ運動について「モウモウ運動があっても不思議ではないが、アフリカ大陸覚醒の陣痛としてもはなはだしい直接行動である」（192頁）と表現した。前田陽一（東京大学教養学部教授、フランス語・文学）「思出のモロッコ」は外交官補として派遣されたモロッコについての回想記である。

アフリカ・日本の経済関係が進展したのはエジプトと南アフリカであった。『日本貿易の現状』（通商白書、1953年6月）は南ア連邦を取り上げ、日本が出超であると分析した（170-171頁）。菊島富雄と徳永博（通産省通商局第一課）は「主要国における経済・貿易の動向について」を執筆した。通産省通商局通商調査課「在外公館の調査報告」には在エジプト公使館と在プレトリア総領事館からの（日本との関係に関する）報告が掲載された。

日本企業はアフリカ市場を調査した。西澤恭三郎「白領コンゴ随想」

「黎明近づく白領コンゴ」は西澤（西澤株式會社取締役社長）がコンゴのウズンブラからコスターマンズビルまで市場視察をした報告である。後者には貴重な写真が掲載されている。玉井菊雄「南阿羊毛の印象」は玉井（高島屋飯田株式會社取締役羊毛部長）が羊毛バイヤーとして南アフリカの羊毛市場（4カ所）を調査した報告である。宮野昇太郎・浅田尚子「三つのアフリカ問題」は中央アフリカ連邦の結成、南アフリカの総選挙、ケニアのマウマウ団について分析した。東洋紡績株式會社經濟研究所は『南阿連邦に於ける綿業保護政策』を刊行した。安川貞治「最近の白領コンゴ事情」は安川（不二商事株式會社大阪支社総務部次長）が2月にコンゴに入って市場視察をした詳細な報告である。安川貞治「南阿三題」は南アフリカ（ヨハネスブルグ、ダーバン、ケープタウン）の写真を掲載している。二塚「白領コンゴ市場の紹介」がある。

日本の新聞記者が戦後初めて移動特派員としてアフリカに派遣されたのは1952年であった。その記者は共同通信の堀義明であった。共同通信社はこの年に世界各地に短期特派員（移動特派員）を派遣した。「アフリカ移動特派員堀義明（外信部）」を1952年3月16日に出発させた（『共同通信社三十五年』79、500頁）。その報告は堀義明（共同通信歐米部）「曉の暗黒大陸縦斷——黑人王國アフリカの怒りの表情——」（1953年4月）である。経路はカラチ、カイロ、トリポリ、チュニス、アルジェー、カサブランカ、ダカール、アクラ、ラゴス、ランバレーネ、ブラザヴィル、ヨハネスブルグ、ナイロビ、エンテッベ、アジスアベバであった。民族主義への理解はあった。「英國は軍隊を急派し、非常事態宣言を發して、モウ・モウ掃滅につとめているが、アフリカに残された豊庫にも、動亂の火はまたもくすぶり始めたのである」（149頁）。ただし残念ながらアフリカ人は「土人」と表記された。

上田秀夫（朝日新聞）はアフリカ視察報告として雑誌論文（2本）を執筆し、日本とアフリカの関係の在り方に言及した。「日本を知らず日本も

知らぬ」において、西アフリカでは日本商品のおかげで日本が知られていること、南アフリカでは日本人だけが白人並みに扱われていることを紹介した。「輸出市場としてアフリカは有望か」において、「急がば回れ式で、ゆっくり外交的、政治的に原住民相手の宣傳でもしたら」（35頁）と提言した。

多様な人々がアフリカを訪れた。林昂「エジプト大學學生の頃」は林（東西交易株式會社社員）のカイロ大学国費留學生の回想記である（参照：林昂「アラブとの70年」『サウジアラビアと日本』2010年7月、13-45頁）。川喜田愛郎「ピラミッドの蔭で」はウイルス学者の川喜田（千葉大学医学部教授）がWHOの専門家として1952年から一年半エジプトのカイロに滞在した記録である。渡辺武男「アフリカに旅して」と小林貞一「アトラス山系の地質瞥見」によれば、渡辺武男（東京大学理学部教授、地質鉱物学）は小林貞一・三土知芳とともに1952年9月にアルジェで開催された第19回国際地質学会議に出席した。今泉篤男（国立近代美術館次長、美術評論家）「私の美術紀行 2 エジプトの絵」がある。「税金のない國モロッコ」を執筆した火野葦平は1953年7月にタンジールに二泊した。小林秀雄「ギリシャ・エジプト寫真紀行」によれば、小林秀雄と今日出海は「朝日新聞特派員」を兼ねてヨーロッパを旅行し、1953年2月にエジプトを訪問した。今日出海「私の履歷書②」（『日本經濟新聞』1969年9月13日）によれば、今日出海と与謝野秀は中学時代の同窓生であったので、与謝野が二人を案内した。小林が送った原稿「エジプトにて」（『小林秀雄全集』別卷Ⅱ、230頁）は「エジプト紀行」として朝日新聞（1953年3月3-4日）に掲載された。

雑誌『世界』は初めてアフリカ特集「アフリカは動く」を組んだ。特集論文は小幡操「「暗黒大陸」のめざめ」、渡邊誠毅「「ジャングルの平和」と戦略資源」、丸山靜雄「戦略的にみた北アフリカ」であり、それにアン

現状分析として画期的な内容であった。小幡操（朝日新聞外報部次長）はアフリカ民族運動を「四つの型」に分類し、アフリカ4地域（北・南・西・東）の民族運動について詳細に比較・分析し、「民族が「みずからの主人となろう」とするアフリカ人の決意と希いは…われわれに何も教えないであらうか」（158頁）と結んだ。渡邊誠毅（朝日新聞調査研究室員）はアフリカの資源をめぐる「国際争奪戦」を描写した。丸山静雄（朝日新聞外報部員）は北アフリカをめぐる米国とソ連の角逐を分析した。

アフリカの民族運動全般に関する論文は冠郁夫「目ざめるアメ（フ）リカ大陸」、「中東・アフリカの民族運動」、都留重人「アフリカ大陸の曙」、甲斐静馬「中近東・アフリカの民族運動とヨーロッパ」、蠟山芳郎「植民地ナショナリズムと反帝国主義」、坂本徳松「アフリカものの語り」等である。各国の民族運動に関する論文はバーム・ダット「残忍な独裁政権にうらぎられた国民」、森永和彦「強まるか・エジプトの発言力」、小山いと子他「共同研究 世界の争点 第五回 モロッコ」、井上勇「英領ケニアのマウマウ團」、マルコム・ジョンソン「アフリカを震撼させるマウ・マウ團」、ベイヤード・ラスティン「アフリカ革命の物語」、「アフリカに生れた自由国」、「イギリスとアフリカ」等である。井上勇（時事通信）の秀作「英領ケニアのマウマウ團」は「それ（武力弾圧——川端）は、長い眼でみれば、アフリカ大陸でのイギリス勢力の没落を早める効果しかないのではないか」（55頁）と結んだ。「アフリカに生れた自由国」は1952年9月に独立したエリトリアについての写真付き解説である。「イギリスとアフリカ」は英国が推進する中央アフリカ連邦が「経済的成果を収め得る可能性が必ずしも強くない」（2頁）と分析した。

概説書としては藤岡謙二郎（京都大学教養部教授）編『アフリカ・オセアニア・兩極地方』と世界文化画報社『アフリカ編』が刊行された。前者の編者序言は「文明が未開地や後進地域と接触した場合、これをいかに變化せしめて行くか」が課題であると指摘した。つまりアフリカを未開地・

後進地域と認識していたのである。これに比して後者は最後の項目「変わるアフリカ」において「世界の思潮に伴って、自然に盛り上がる民族独立の意識と知識の向上は、アフリカ大陸を何時までも植民地としては置かないであろう」（72頁）と記述した。民族独立運動を評価していたのである。岡倉古志郎『第三勢力——中立と平和——』（要書房、1953年4月）はアジア・ナショナリズムの延長線上に「アジア・アラブの民族主義国家」を取り上げたが、アフリカ・ナショナリズムには言及しなかった。平凡社編『世界美術全集 4 古代エジプト』は立派である。

研究者の論文としては柳沢英二郎（名古屋大学法学部助手）「エジプトの民族運動」が先駆的業績である。エジプトで勃発した民族運動の最新の動向（1951年10月から1952年11月まで）を整理し、附記（1953年1月25日）を付け、それを1953年2月号に掲載したのである。直近の政治動向の歴史（それを柳沢は「現在史」と呼称した。柳沢英二郎『戦後国際政治史 1944～1958』1974年3月、288頁）を論文にすることは至難の業である。

山川惣治『少年ケニヤ』（第1巻：1953年7月～第13巻：1955年11月）の影響力は圧倒的であった。最初は『産業経済新聞』（1951年10月7日から）に連載された。舞台は1941年の英領東アフリカのケニア、村上大助はモンバサの綿布商会の日本人商人、その息子がワタル（物語の主人公）であった。

10 1954年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

1月6日 南アフリカ連邦の業者は輸入税引上げで大阪の業者に綿布の解約を申し入れた（毎）。2月19日 在エジプト公使館は大使館に昇格した（朝）。4月13日 与謝野秀公使は大使に任命された（朝・毎）。5月23日（龍法 '18）51-4. 356（2670）

会見「チュニジア独立運動指導者 ベン・ユーセフ氏が語る」（毎）。6月5日 与謝野大使はシリア公使を兼任した（毎）。9月22日 スーダンのイブラヒム・エル・ムフティ貿易経済相は愛知通産相と懇談した（朝）。9月24日 スーダンと日本は貿易交渉を開始した（毎）。9月27日 平岡特派員（ロンドン）報告「日本品、アフリカへ進出」（毎）。10月5日 佐藤邦人は朝日新聞のアフリカ特派員としてアフリカ航路第一船大阪商船大阪丸で出発した（朝）。同時に、佐藤巧二は毎日新聞のアフリカ特派員として同船で出発した（毎）。10月18日 日伊首相会話はアジア・アフリカ市場での競争回避で一致した（毎）。12月15日 日本エジプト通商懇談会が開催された（毎）。スーダンのムフティ商相（ママ）は対日輸入制限を撤廃すると言明した（朝）。12月21日 会見「エジプトの婦人運動の指導者シャフイク女史語る」（毎）。

アフリカと世界

3月12日 解説「ダカール会議 サハラ以南に戦略線 経済開発、輸送、通信を検討」（毎）。7月3日 英国とリビアは大使交換を決定した（朝）。7月22日 米国はリビアと空軍基地協定を締結した（毎）。8月6日 インドネシア政府はアジア・アフリカ会議を9月にジャカルタで開催すると発表した（毎）。9月24日 国連総会は南ア連邦における人種差別問題等を議題にすることを決定した（毎）。9月25日 ネール（インド）とサストロアミジョヨ（インドネシア）の両首相はアジア・アフリカ会議の開催について提案した（朝・毎）。11月6日 米国とエジプトは経済援助協定に調印した（朝）。11月10日 インドネシアのスカルノ大統領はアジア・アフリカ会議を来年二・三月にインドネシアで開催すると発言した（毎）。12月14日 国連総会は南ア連邦の人権無視を検討すると決議した（朝）。12月16日 国連総会政治（安全保障）委員会はチュニジア問題の討議を延期した（毎）。12月28日 東南アジア首相会議はアジア・アフリカ会議を4月末にインドネシアで開催すると発表した（毎）。12月29日 東南アジア首相会

議はアジア・アフリカ会議に日本と中共を招請すると発表した（朝・毎）。森特派員（ロンドン）報告「“植民地主義への反発”」（朝）。解説「アジア・アフリカの民族運動⑦ アフリカ」（朝）。

北アフリカ

エジプト

1月13日 エジプト政府は回教同志会を非合法化した（朝・毎）。1月14日 エジプト政府は非常事態を宣言した（朝・毎）。1月19日 解説「すばらしい逸品ぞろい 競売される元エジプト国王の財産」（毎）。石山特派員（カイロ）報告「特派員の手帳 派手な軍部独裁内閣」（朝）。2月24日 ナギブ大統領（首相兼務）は辞任し、ナセル副首相（中佐）が首相に就任した（朝・毎）。2月26日 解説「就任八カ月で追放 行詰まっていたナギブ政策」（朝）。内閣の改造が発表された（朝・毎）。2月27日 ナギブは大統領に復帰し、ナセル首相は留任した（朝・毎）。3月1日 解説「エジプトを動かす十二人」（朝）。3月3日 藤田特派員（ロンドン）報告「政局の安定は疑問 英、エジプトの成行き注視」（毎）。3月6日 ナセル首相は大赦令を発令した（朝・毎）。3月8日 ナギブ大統領は首相に復帰した（朝・毎）。3月14日 エジプト政府は全政治犯の大赦を発表した（毎）。3月25日 革命会議は7月に全権を議会に引き渡すと声明した（朝・毎）。3月26日 エジプト政府は政治犯数百名を釈放した（朝）。革命会議は「解散される」と発表された（朝）。ナセル中佐は軍務に復帰した（朝）。3月27日 労働組合はゼネストを指令した（朝）。革命会議はナギブ大統領を非難した（毎）。3月28日 ナギブ大統領は革命会議を存続すると表明した（朝・毎）。3月29日 ゼネストが拡大した（朝）。エジプト政府は全国諮問会議を設置すると発表した（朝）。4月3日 カイロで革命会議反対・議会政治復帰の学生デモが開催された（朝）。4月15日 革命会議は三政党の首脳を追放した（朝）。4月17日 革命会議はナギブ大統領の首相兼任を解除しナセルを首相・軍最高司令官に任命した（朝）。4月28日 ナセル首相は将校

を含む52名を逮捕した（朝・毎）。4月30日 ナセル首相は解放戦線議長に就任した（毎）。6月12日 解説「古代文明のナゾ秘める 五千年前の“太陽の船”」（毎）。7月10日 英エ会談が再開された（朝）。7月13日 エジプト政府は対英貿易制限を撤廃した（朝）。7月27日 英エ両国はスエズ運河基地に関する協定に仮調印した（朝・毎）。松岡特派員（ロンドン）報告「「スエズ撤退」妥結 英・エジプト仮調印 姿消す英軍」（朝）。7月28日 解説「72年ぶりの撤退 中東の防衛機構に一転機」（毎）。7月29日 社説「明るくなった中近東情勢」（毎）。8月16日 英軍二千名がスエズから引揚げた（朝・毎）。9月1日 内閣が改造された（朝・毎）。10月19日 英国・エジプト協定が調印された（朝・毎）。カイロに警戒態勢が布告された（朝）。10月26日 ナセル首相は狙撃された（回教同志会による暗殺未遂事件）が弾丸は側近を負傷させた（朝・毎）。10月27日 カイロで焼打事件が発生した（朝）。10月29日 エジプト政府は回教同志会の解散を命令した（朝・毎）。10月30日 回教同志会の指導者ホデイビ等四百人が逮捕された（朝・毎）。11月14日 革命会議はナギブ大統領を解任した（朝）。ナセル首相が大統領代理となった（朝）。11月16日 解説「“ナギブ追放”の背景 革命後の権力争い」（朝）。11月17日 大統領の権限を内閣に移管した（朝）。11月20日 閣議はスエズ協定を批准した（朝）。12月5日 革命会議は回教同志会の解体を発表した（朝）。

[スーダン]

1月6日 国家統一党のエル・アザ（ズハ）リが初代首相に選出された（朝）。1月9日 エル・アズハリ首相の自治政府が発足した（朝・毎）。3月1日 ナギブ大統領が訪問した際、衝突事件が発生した。デモ隊はウンマ党支持者とみられる（朝）。スーダン政府はウンマ党のシディック・エルマディ党首を逮捕した（毎）。3月10日 スーダン議会が発足した（朝）。12月26日 エル・アサ（ズハ）リ首相はエジプトとの関係について制限付統合を表明した（朝）。

リビア

10月17日 イドリス国王は反逆罪で皇太子の息子を逮捕した（毎）。10月18日 リビア上院は米国リビア条約を批准した（朝）。12月10日 ベン・ハリム首相はフランス軍駐留協定を更新しないと声明した（朝）。

〔チュニジア〕

3月2日 ムザリ首相の新内閣が成立した（朝）。3月15日 チュニスで学生の暴動が発生した（朝・毎）。5月23日 ビゼルタで暴動が発生しフランス軍と衝突した（朝）。5月29日 ムザリ首相は暴漢に襲撃された（毎）。6月17日 内閣は辞職した（朝）。7月5日 フランス軍部隊が急派された（毎）。ムザリ首相は辞任した（毎）。7月6日 南部ガフサで暴動が発生した（朝）。7月24日 チュニジア首長の護衛が射殺された（朝）。7月30日 フランス政府はヴォアザール総督を解任しムーラン中將を総督に任命した（朝）。フランス政府はチュニジア改革案（自治権付与）を決定した（毎）。7月31日 フランスのマンデス・フランス首相はチュニスに到着した（朝）。デストゥール党のブルギバは「実のある仏提案」と論評した（朝）。8月2日 アマールが首相に指名された（朝・毎）。8月7日 新政府が成立した（朝・毎）。9月1日 フランス軍と現地人の衝突事件が発生した（朝）。9月4日 フランスとチュニジアは交渉を開始した（朝・毎）。11月14日 民族主義者はフランス軍と戦闘した（毎）。12月6日 フェラガ党の暴徒が投降した（毎）。12月11日 暴動は終息した（毎）。

〔モロッコ〕

1月21日 部族・宗教指導者はフランスの政策を非難する共同声明を発表した。ムーア人族長はベン・アラファ首長を承認しないと表明した（朝）。2月16日 内閣は総辞職した（朝）。2月19日 新内閣が組織された（朝）。3月2日 ダリ首相の新政権が成立した（毎）。3月5日 アラファ首長は手投弾で負傷した（朝）。5月1日 民族主義のイスチ（ティ）クラル党と民主党の指導者が追放された（朝）。5月20日 フランス政府はモロッ

コ総督にラコストを任命した（毎）。5月31日 カサブランカでテロ事件が発生した（朝）。8月1日 フランスはモロッコに派兵した（朝）。8月2日 フェズでベン・ユーセフ支持派のデモが警察隊と衝突した（毎）。8月7日 イスティقلال党はベン・ユーセフの帰国を要求してストを指令した（朝）。ポート・リョーテ（リオテ）で暴動が発生した（朝・毎）。

〔アルジェリア〕

9月9日 アルジェ付近で大地震が発生した（朝・毎）。11月1日 各地で暴動が発生した（毎）。11月29日 フランス軍は「反徒の一団」と衝突した（朝）。

西アフリカ

〔ゴールド・コースト〕

12月23日 佐藤特派員（アクラ）報告「アフリカの海を行く」（毎）。12月26日 佐藤特派員（アクラ）報告「アフリカ通信（上）ちぢれ毛の黒人首相」（毎）；（中）12月27日；（下）12月28日。

〔ナイジェリア〕

12月3日 佐藤特派員（ラゴス）報告「アフリカの土人 芽生える民族主義」（朝）。12月7日 佐藤特派員（ラゴス）報告「英領西アフリカ市場を見る」（朝）。12月14日 佐藤特派員（ラゴス）報告「有望なナイジェリア市場」（毎）。12月17日 佐藤特派員（ラゴス）報告「日本びいきのナイジェリア」（毎）。佐藤特派員（ポート・ハーコート）報告「日本商人へ“黒い顧客”の希望」（毎）。12月20日 佐藤特派員（ラゴス）報告「西アフリカ通信」（朝）。

〔フランス領西アフリカ〕

12月27日 佐藤特派員（ダカール）報告「ダカールの歳末」（朝）。

東アフリカ

エチオピア

11月28日 英国とエチオピアは友好条約について交渉を開始した（毎）。

[ケニア]

3月3日 ケニア植民地政庁はモウモウ団と反乱停止で交渉中と発表した(朝・毎)。1月に逮捕されたモウモウ団の通称チャイナ將軍(ワルヒウ・イトテ)が交渉を仲介した(毎)。

[ウガンダ]

5月31日 ウガンダの一部に非常事態が宣言された(朝)。

中部アフリカ

[コンゴ]

11月24日 佐藤特派員(マタジ)報告「コンゴを訪ねて」(朝)。11月28日 佐藤特派員(レオポルドヴィル)報告「アフリカ通信 コンゴ紀行(上)」(毎)；(下) 11月30日。

南部アフリカ

南アフリカ連邦

4月12日 マラン首相はベチュアナランド、バストランド、スワジランドの三植民地の合併を要求した(朝)。11月7日 佐藤特派員(ダーバン)報告「ダーバンを見る 高関税に悩む日本品」(朝)。11月18日 佐藤特派員(ヨハネスブルグ)報告「南ア市場の現状を見る」(毎)。11月23日 佐藤特派員(ダーバン)報告「アフリカ通信(上)」(毎)；(中) 11月24日；(下) 11月25日。11月28日 森特派員(ロンドン)報告「南ア連邦近く重大決定 マラン首相後継に絡み」(朝)。11月30日 ストリ(レイ)ダムが首相となった(朝・毎)。12月15日 佐藤特派員(ヨハネスブルグ)報告「関心と呼ぶ日本の映画」(毎)。

1-2 報道と解説

在エジプト公使館は1954年4月13日に大使館になった。「エジプトは大使館に 政府は19日の閣議で、在エジプト公使館の大使館昇格…を正式に決定し、近く国会に提出する」(朝、2月19日)。「双方大使館に昇格 日本エ

ジプト両国はこのほど従来相互においていた公使館を大使館に昇格させることに決定…日本側は与謝野秀駐エジプト公使を…大使に任命すると13日外務省から発表した」（朝、4月14日）。日本とアフリカ諸国の経済関係は進展した。日本品がアフリカに進出することに英国の業者は反発した（毎、9月27日）。

アフリカ人政治家の来日と会見はアフリカ人の声を日本に伝えた。訪日したチュニジア独立運動指導者ベン・ユーセフ（ネオ・デストゥール党書記長：Ben Yusef）は5月22日に民族主義運動について説明した。エジプトの婦人参政権獲得運動の指導者ドリア・シャファイク（Doria Shafik）は12月18日に来日し、婦人議員と懇談した。

アジア・アフリカ会議の開催の準備が開始された。インドネシア政府は1954年9月25日にコロンボ会議の延長としてアジア・アフリカ会議の開催を提案した。12月28日、東南アジア首相会議はアジア・アフリカ会議を次年4月に開催することで合意した（毎、12月29日）。首相会議は「日本、中共を含む二十五カ国」に招請状を送ることになった。アフリカは中央アフリカ連邦、エジプト、エチオピア、ゴールド・コースト、リベリア、スーダンの6カ国であった。「アジア・アフリカ会議は世界平和、アジア・アフリカの経済的社会的発展のために努力し、また植民地主義、人種主義および国家主義などの特別の問題を検討することになろう」（毎、12月30日）。「アジア・アフリカ」という地域概念が登場した。

民族主義への対応を迫られて、植民地領有国の仏国と英国は1954年3月11日から18日までダカル会議（アフリカ防衛調整会議：African Defense Facilities Conference）を開催した。「政治的自治を進んで認めていこうとする英国と、とにかく旧来の威圧的植民政策を押し通しがちなフランス、ベルギーなどとの間の意見対立を解消することも大きな問題となるだろう。…アフリカの民族主義および共産主義運動に対する対抗措置がある。…ただ問題はアフリカを西欧のよりどころとして考えることが必ずしもア

フリカ人のためのアフリカを意味しないという現実であろう」(毎、3月12日)。軽視されてきた、この会議についての適切な解説であった。

北アフリカの民族主義運動は連動した。エジプト情勢は複雑であった。エジプトと英国が協定を締結し、英軍のスエズ撤退が妥結したことは大きな成果であった。他方、ナギブの失脚から再登場まで、エジプトの権力闘争は政治の不安定を露呈した。チュニジアとモロッコの情勢は混迷したが、民族主義発展の趨勢は確実に became。「チュニジアで民族運動が爆発したのは52年1月。…この運動の指導者は…ネオ・デストゥール党のハビブ・ブルギバ。…彼が育てた反仏独立運動の芽は、不十分ながら去る7月のマンドス・フランス改革案となり、チュニジアに内政の自治が約束された」(朝、12月29日)。「モロッコでもチュニジアと時を同じくして民族主義が火を噴いた。この運動を指導したのはイスチクル党。仏当局の強硬な弾圧措置にもめげず、スト、暴動が打ちつづいた。そして仏政府はついにチュニジアについて8月、自治の拡大を誓わねばならなかった」(朝、12月29日)。アルジェリアでも民族主義の運動が勃発した。11月29日、アルジェリアでフランス軍と「反徒の一团」が衝突した。「去る11月、大規模な反乱が起って仏当局をあわてさせた。従来アルジェリアは民族主義の低いところとされただけに、この動きは仏領北アの民族運動が一つのものとなり、…アラブ民族主義の一翼となったことをはっきり示すものであった」(朝、12月29日)。

サハラ以南アフリカの至る所で民族解放運動が展開された。西アフリカのゴールド・コーストとナイジェリアは自治から独立へと大きく動き始めた。ゴールド・コーストではヌクルマ(ンクルマの当時の日本語表記: Kwame Nkrumah)が黒人首相になった。「獄中から立候補、当選した党首ヌクルマーがアフリカ植民地最初の黒人首相として原住民内閣を組織した」(朝、12月29日)。事態はナイジェリアに波及した。「ここでも現在の準自治政府を不満として56年を目標に完全独立への闘いを展開している」

（朝、12月29日）。東アフリカのケニアで英国は武力弾圧を強行した。「その指導者ジョモ・ケニアッタはロンドン大学卒で、…絶大な支持は失われている」（朝、12月29日）。事態はウガンダに波及した。英領ウガンダでは非常事態が宣言された。南アフリカの南ア連邦の人種隔離（アパルトヘイト：Apartheid）政策は危機に直面した。「この極端な人種差別は、与党国民党の基盤であるブアー人の白人優越主義の表現であるが、これに対して有色人種は三つの異った民族運動を展開している」（朝、12月29日）。このように朝日新聞の解説「アジア・アフリカの民族運動⑦ アフリカ」は1954年当時のアフリカ民族解放運動の現状分析として最高の内容であった。「ケープ・タウンからカイロにまでこだまするアフリカ解放の叫びは、やがては“暗い大陸”を“明るい大陸”に変えねばおかまいであろう」（朝、12月29日）。

朝日新聞社と毎日新聞社はアフリカへの移動特派員を1954年10月に派遣した。大阪商船は西アフリカ航路を開始することになり、大阪丸は10月5日に神戸港を出港した。同船に乗船したのは朝日新聞の佐藤邦人記者と毎日新聞の佐藤巧二記者であった。

朝日新聞の佐藤邦人記者（大阪本社経済部次長）は主として市場調査（日本品の市場、現地の産業）を担当し報告（5本）した。「アフリカの土人」というタイトルは残念だが、アフリカ人の日常生活を活写した写真は日本の読者にとって新鮮であったと思われる。また佐藤記者は民族主義の芽ばえを明確に把握していた。「戦後は黒人の民族主義ないし階級意識の芽が生え出しているのであり、またそうした動きに応じて、いわゆる白人の「植民政策」も大きく旋回点に迫られているようである」（朝、12月3日）。

毎日新聞の佐藤巧二記者（大阪本社外信部員）は政治経済の実情を報告（14本）した。南アフリカ連邦からは「1948年以来政権を握った国民党のマラン政府は欧州文化を守るためにと称して人種区別（アパルテイット）政

策を次々に法律化した」(毎、11月23日)、「人種区別政策が緩和されそう
な見通しはいまのところない」(毎、11月24日)と、人種隔離政策(アパ
ルトヘイト)の実情を紹介し、日本人の置かれた微妙な立場に言及した。
日本総領事館で開催された座談会の出席者は総領事代理西村勘一、副領事
寺田喜市、同藤田保二、東洋綿花菊地良一郎、兼松弓場実、丸紅青井孝一、
同島尾義郎、八木通商長谷川勇、興服産業竹内弘次であった。ナイジェリ
アとゴールド・コーストからは民族主義の高揚、独立の準備が紹介された。
「ナイジェリア人の燃えるような自治独立の願望に対して、英国は先を見越
して自主的後退政策をとっており、…英国も“1956年にナイジェリアの自治
を実現する”と約束している」(毎、12月17日)。佐藤記者はヌクルマ首相
と会見した。「1952年(1951年)最初の総選挙が行われたが、この殉難者
と目されたヌクルマ氏の率いる人民協議会党(会議人民党)が圧倒的勝利
を占めた。英総督はあわてて同氏をろう屋から出し最初の黒人首相に就任
を依頼したのだ」(毎、12月26日)。佐藤記者(毎)はアフリカ人の呼称に
ついて「土人」よりも「黒人」を多用した。

映画では「モガンボ」(ジョン・フォード監督、エヴァ・ガードナー主
演)が1954年4月に、「少年ケニヤ」(山川惣治原作)が10月に上映された。
「モガンボ」の広告は「ゴリラ贈呈 エヴァ・ガードナーが日本のファン
の皆様には、はるばるケニヤから猿やその他の動物を送ってまいりました。
各上映館ではモガンボ・クイズを実施致しますのでその正解者には抽選で
進呈いたします」(毎、4月28日)であった。「少年ケニヤ」の広告は「大
評判の「少年ケニヤ」がこんな面白い映画になりました。少年ケニヤ 原
作山川惣治」(毎、10月11日)であった。その他、「ジャングルの百獣」
「タンガニイカ」「王家の谷」「アフリカ縦断」「ターザンと密林の女王」
「秘境ザンジバー」「ジャングルの決闘」が公開された。

2-1 論文と著書

論文

上田秀夫「アフリカの新聞記者 □同じ有色人種ではあるが□」『世界週報』35巻1号、1954年1月、60-61頁。今日出海「クレオパトラ」『婦人公論』39巻1号、1954年1月、242-252頁。今日出海「失楽の王ファルーク」『新潮』51巻1号、1954年1月、81-99頁。藤井正夫「英領東アフリカ貿易とイギリス商社」『貿易界』55号、1954年1月、26-31頁。山邊義明「ウガンダの近況及びリベリアとの取引」『海外貿易情報』49号、1954年1月、10頁。A・ウインター「ナギブの軍事独裁の背景」『世界情勢旬報』224号、1954年2月、21-28頁。「建国一年半 エジプトのこのごろ」『アサヒグラフ』1954年2月3日、8-9頁。中村洸「エジプトにおける駐留軍の刑事裁判管轄権について——エジプト混合裁判所の判決を中心として——」『法學研究』27巻2号、1954年2月、40-53頁。日本紡績協會調査部「綿製品市場めぐり（その三）英領中央アフリカ——ニアサランド、北ローデシア及び南ローデシア——」『日本紡績月報』86号、1954年2月、49-62頁。藤井正夫「英領東阿の特産物貿易と英国商社（一・二・三・四・五）」『貿易界』56号、1954年2月、22-25、31頁；57号、1954年3月、18-20頁；58号、1954年4月、15-17頁；59号、1954年5月、14-17頁；60号、1954年6月、12-13頁。「モロッコの鉱業発展」『海外経済事情』141号、1954年2月、13-14頁。今井正「再燃したモロッコ問題」『時の法令』126号、1954年3月、9頁。H「黄金海岸の流線形帝國主義」『エコノミスト』32巻12号、1954年3月、38-39頁。岡田喜秋「作家と旅行記——グレアム・グリーンの「アフリカ紀行」——」『學鐙』51巻3号、1954年3月、29-31頁。K「革命の實際の推進力 = エジプト副首相 = G・A・ナッセル」『世界週報』35巻9号、1954年3月、35頁。高山底「クーデター三題ばなし 1 エジプト」『サンデー毎日』1954年3月14日、30-31頁。立川英雄「ナイジェリアの政治と貿易」『輸出綿糸布月報』4巻2・3号、1954年3月、29-36頁。T・I生「再燃したモ

ロッコ問題」『世界とわれら』33巻3号、1954年3月、37-40頁。ジョセフ・ビー(ヂー)・ハビブ「埃及に於ける陶磁器情況」『海外貿易情報』51号、1954年3月、6-7頁。武者小路公共「アビシニヤ千一夜」『政界往來』20巻3号、1954年3月、85-89頁。「モロッコの外國貿易事情」『海外經濟事情』144号、1954年3月、12-13頁。「モロッコ問題」(を含む6件)外務省國際協力局第一課『國際連合第八総会の事業』外務省國際協力局、1954年3月、12-19、58-61、64-67頁。ドナルド・ロビンソン「エジプトを文盲から救つた盲人文相」『リーダーズ・ダイジェスト』9巻3号、1954年3月、99-105頁。ジョン・ガンサー「今も気ままに人を殺す女酋長」『リーダーズ・ダイジェスト』9巻4号、1954年4月、40-43頁。岸本実(紹介)スコット「南ローデシアの移住労働」『地理學評論』27巻4号、1954年4月、180-181頁。木村博「エジプトよどこへいく」『東邦經濟』25巻4号、1954年4月、16-19頁。谷川徹三「エジプトの壺」『藝術新潮』5巻4号、1954年4月、45-47頁。日本紡績協會調査部「綿製品市場めぐり(その四)南ア連邦」『日本紡績月報』88号、1954年4月、31-43頁。藤本利治(紹介)E.E.フォスター「北ローデシア・カフェー平地の可能なる利用」『人文地理』6巻1号、1954年4月、49-51頁。ジョン・ガンサー「対照の国——ニジェリア」『リーダーズ・ダイジェスト』9巻5号、1954年5月、130-139頁。ジョセフ・ジー・ハビブ「政變と關稅」『海外貿易情報』52号、1954年5月、5頁。「ワディ・フェラン2号井の産油」『内外石油情報』74号、1954年5月、42-45頁。「アフリカの反英テロ マウマウ団」『アサヒグラフ』1954年6月2日、26-27頁。猪名川治郎「アフリカの「ひふ」□公館めぐり土産話□」『世界週報』35巻17号、1954年6月、26-27頁。猪名川治郎「アフリカを廻って(1)(2)(3)」『世界とわれら』33巻6号、1954年6月、26-29頁；33巻8号、1954年8月、26-29頁；33巻10号、1954年10月、43-45頁。内海俊一「コンゴ貿易の縮小化を防げ」；大河原良雄「アフリカ旅行雜記」『輸出綿糸布月報』4巻6号、1954年6月、27-29頁；30-37頁。「エジプト 世界最古の墓」『アサヒグラ

フ』1954年6月30日、20-21頁。大河原良雄「アフリカの實情と貿易」『海外貿易情報』53号、1954年6月、1-9頁。鈴木雅也「アテナイのエジプトに於ける敗戦の結果について」『論集 神戸女学院大学』1巻2号、1954年6月、41-48頁。林寿郎「南ア連邦」（を含む6カ国）毎日新聞社編『世界めぐり』毎日新聞社、1954年6月、58-74頁。「フランス信託統治領カメルンの農鉱資源開発状況」『海外経済事情』149号、1954年6月、10-12頁。「フランスのチュニス占領」「イギリスのエジプト占領」田中直吉『近世欧州国際政治史 上巻 ビスマルク時代 I』三和書房、1954年6月、190-197、197-219頁。ヘミングウェイ「死のアフリカ密林脱出!」『文藝春秋』32巻8号、1954年6月、196-223頁。「アフリカの政治・経済の雑多性」『海外経済事情』151号、1954年7月、12-13頁。マルセル・エグルトオ「叛乱に悩むイギリスのアフリカ植民地」『世界と日本』1954年7月、71-74頁。「エジプト天圖の謎」野尻抱影『續 星と傳説』創元社、1954年7月、21-26頁。河盛好藏「黒人の共和國」『心』7巻7号、1954年7月、53-57頁。ジョン・ガンサー「白人はアフリカから追われるか?」『リーダーズ・ダイジェスト』9巻7号、1954年7月、50-57頁。「黒色アフリカの目ざめ」ユベール・デシャン（松本平治譯）『帝國主義の没落——植民地支配の末路——』白水社、1954年7月、110-114頁。杉田喜三郎「スターリング地域諸国における経済・貿易の動向について 東西アフリカ篇」『外国為替』99号、1954年7月、17-20頁。西野照太郎「アフリカの悲劇」『世界週報』35巻21号、1954年7月、24-25頁。サラ・ベン・ユーゼフ「わが反植民地闘争」『改造』35巻7号、1954年7月、172-180頁。（紹介）L.S.B.リーキー「マウマウとキクユ」；B.デヴィドスン他編「新しい西アフリカ」『世界週報』35巻19号、1954年7月、68頁；68-69頁。「アウストラロピテクスの石器製作の問題」『人類學雜誌』63巻5号、1954年8月、39頁。「スーダンおよびギニアの諸言語」「バントゥー諸語」「ブッシュマンおよび hottentott 諸語」メイエ／コーアン監修（泉井久之助編）『世界の言語』朝日新聞社、1954年8月、

737-864、865-915、916-928頁。伊達龍一郎「アフリカの體臭」『オール讀物』9巻8号、1954年8月、122-127頁。吉岡千代三「南阿の素描 □伝統的な白人と黒人の対立□」『世界週報』35巻23号、1954年8月、48-49頁。蠟山芳郎（書評）西野照太郎「鎖を斷つアフリカ」『圖書』59号、1954年8月、23-24頁。岩田慶治「アフリカ」姫岡勤・藤岡謙二郎編『世界地理民族誌』朝倉書店、1954年9月、142-172頁。大園頼茂「英・エ協定と中近東の動き」『東邦經濟』24巻9号、1954年9月、14-17頁。小黑大州「南阿連邦の白人主義 □複雑な人種構成と偏見問題□」『世界週報』35巻27号、1954年9月、48-49頁。川喜田愛郎「エジプトから歸つて——傳研集談會にて——」『日本醫事新報』1586号、1954年9月、25-30頁。ジョン・ガンサー「エチオピアの内幕」『リーダーズ・ダイジェスト』9巻9号、1954年9月、59-66頁。田中直吉「アフリカ分割をめぐる國際的葛藤（一・二）」『法學』3巻2号、1954年9月、50-81頁；3巻3号、1955年2月、36-57頁。「アフリカ、ダカール——リスボン」中山正善『右往左往』天理教道友社、1954年10月、226-230頁。板垣雄三「エジプトの歴史」上原専祿他監修『資本主義的ヨーロッパの制覇』（世界史講座 IV）東洋經濟新報社、1954年10月、286-297頁。「エジプト国籍法」法務府（省）民事局『各国国籍法規集（仮訳）』法務省民事局、1954年10月、81-89頁。「欧州諸国のアフリカ分割」「植民地問題をめぐる葛藤」田中直吉『近世欧州國際政治史 上巻 ビスマルク時代 II』三和書房、1954年10月、1-49、50-90頁。大森貝介「マウマウ團の支那將軍」『オール讀物』9巻10号、1954年10月、194-204頁。川喜田愛郎「エジプトのことなど」『婦人之友』48巻10号、1954年10月、29-30頁。「スエズをめぐる英埃協定」『世界』106号、1954年10月、133-137頁。徳永博「スターリング地域諸国における經濟・貿易の動向について 南阿連邦篇」『外国為替』105号、1954年10月、24-27頁。牧内正男「アジアアフリカの反植民地主義獨立運動」『自警』36巻10号、1954年10月、49-52頁。「ココアの暴騰（騰）と増産対策」『海外經濟事情』159号、1954（龍法 '18）51-4、370（2684）

年11月、14頁。「ゴールド・コースト政府 対日輸入許可申請受付」『通産省公報』1512号、1954年11月、5頁。西野照太郎「「蕃奴」と「黄奴」Yellow Serf——中國とアフリカの關係」『學鐙』51巻11号、1954年11月、22-24頁。西野照太郎（紹介）アラン・ペートン「遅すぎたファラローブ アフリカの政治小説」『机』5巻11号、1954年11月、20-21頁。イ・レーミン「アフリカにおける帝国主義列強の競争とアフリカ諸民族の民族解放運動」ヴェ・ア・マスレンニコフ編（南信四郎訳）『第二次世界大戦後の植民地体制 〔下巻〕』三一書房、1954年11月、207-271頁。「アフリカ諸国」『テレビラジオ年鑑 昭和30年』テレビラジオ新聞社、1954年12月、220-221頁。「アフリカの変化」『世界史講座 V 帝国主義』東洋経済新報社、1954年12月、43-51頁。「アルジェリアの反乱」『アサヒグラフ』1954年12月22日、18-19頁。加藤一朗「現今の古代埃及語研究について」『西洋史學』24号、1954年12月、52-59頁。「北アフリカにおける民族解放運動の発展」『世界情勢旬報』237号、1954年12月、44-52頁。小林「ゴールド・コーストをめぐる諸問題——黒人政府・単一経済・開発計画・対日通商——」『経済調査』（大和銀総合研究所）83号、1954年12月、11-24頁。島田正彦「南阿連邦の人種構成」『人文地理』6巻5号、1954年12月、55-58頁。富村傳「埃及古王國の編年をめぐつて——第四王朝の年代考證——」『古代學』3巻4号、1954年12月、389-401頁。富村傳「カルトゥーム文化の一樣相」『史峯』1巻2号、1954年12月、49-55頁。ジム・マーカム「アフリカ・ケニアの反乱」『週刊サンケイ』3巻53号、1954年12月、60-61頁。

著書

外務省経済局第六課『エジプトの貿易事情』（中近東経済資料1号）外務省経済局、1954年4月。外務省経済局第六課『スダンの貿易事情』（中近東経済資料2号）外務省経済局、1954年4月。海外市場調査会『アフリカ ー1ー』海外市場調査会、1954年5月。リヴィングストン（菅原清治訳）『アフリカ探検記』河出書房、1954年5月。西野照太郎『鎖を断つアフリカ』

岩波書店、1954年6月。外務省欧米局第三課『英埃スエズ問題の解決について』（英国関係資料2号）外務省欧米局、1954年7月。イブン・バットゥータ（前嶋信次譯）『三大陸周遊記』河出書房、1954年8月。グレアム・グリーン（田中西二郎譯）『地圖にない旅』新潮社、1954年9月。岩田慶治編『アフリカの自然と生活』毎日新聞社、1954年10月。「スエズ運河基地に関する…連合王国とエジプト政府との間の協定（英文）」『条約集第32集』外務省条約局、1954年11月。日本工業俱樂部編『南アフリカ連邦事情』（經濟調査資料 第五號）日本工業俱樂部、1954年12月。

2-2 文献と概説

日本政府においてアフリカ問題に主として対応したのは外務省と通産省であった。外務省経済局第六課は「中近東経済資料」として『エジプトの貿易事情』と『スダンの貿易事情』を刊行した。大河原良雄（外務省経済局第四課）はアフリカ6都市（ラゴス、アクラ、ヨハネスブルグ、プレトリア、ナイロビ、カイロ）を訪問し市場調査を実施した。その報告が「アフリカの實情と貿易」と「アフリカ旅行雜記」である。前者において「現實にこの目でみるまではあそこまで發展しているとは考えませんでした」（1頁）と実感を吐露し、「戦後の民族意識というものの高まりは大變なもので、土人達の政治参劃の希望を無下に押さえることはできなくなって來ております」（2頁）と民族主義の台頭を正直に表現した（大河原は1942年に外務省に入省し、1951年に米国に留学し、帰国後、経済局に勤務した。元駐米大使）。猪名川治郎（外務省情報文化局第四課長）は1954年3月半ばから二週間、アフリカ在外公館を視察した。その報告が「アフリカを廻って（1）」と「アフリカの「ひふ」」である。前者において南アフリカの人種問題に言及した。「基本的なことは数の少ない白人人口が龐大な黒人人口に脅威を感じていることである」（29頁）と言及し、黒人を差別した白人に同情していることには違和感がある。後者において、「皮膚の色」の

違いをことさら強調し、黒人を土人・原住民と表現した。このように外務官僚のアフリカ観に差異が見られる。今井正（外務省情報文化局第一課）は「再燃したモロッコ問題」を執筆した。戦前の外交官、武者小路公共は「アビシニヤ千一夜」においてエチオピア出張を回顧した。

『日本貿易の現状』（通商白書、1954年6月）はリベリア、イギリス領アフリカ、南アフリカ連邦を取り上げ、繊維製品の輸出増加を紹介した（121、130頁）。吉岡千代三（通産省軽工業局長）は1954年6月、ブラジルから南アフリカ（ヨハネスブルグ）を訪問した。その報告が「南阿の素描」である。吉岡を出迎えた在留邦人は領事館員3名とその家族、商社関係者5、6名、外務省係官であったと記録した。杉田喜三郎と徳永博（通産省通商局市場第一課）は「スターリング地域諸国における経済・貿易の動向について」を執筆した。

アフリカ市場調査は継続された。海外市場ガイドブックとして海外市場調査会『アフリカ -1-』が刊行され、田中澄夫「白領コンゴ」和西河照雄「英領西アフリカ」が掲載された。日本工業倶楽部は「経済調査資料 第五號」として『南アフリカ連邦事情』を刊行した。民間では、内海俊一（西沢株式會社貿易部長）「コンゴ貿易の縮小化を防げ」がある。

日本の文化人がエジプトを旅行することが増加した。その理由の一つとして在エジプト公使（大使）与謝野秀の介在があった。今日出海「失楽の王ファルーク」は与謝野秀君からいつでも来といわれていたと回顧している（82頁）。「エジプトの壺」を遺した谷川徹三は世界連邦世界運動第五回大会（1953年8月）に出席した後、ヨーロッパ各国を旅行し、エジプトに立ち寄って、10月に帰国した。

戦後最初のフランスへの留学生として、遠藤周作は1950年6月4日に横浜港を出港した。船（マルセイエーズ号）は途中の6月28日にジブチに寄港し、遠藤はアフリカの大地を踏んだ。遠藤の処女小説は「アデンまで」（1954年11月）とされていたが、その前に伊達龍一郎「アフリカの體臭」

を『オール讀物』（1954年8月）に寄稿していた。フランスの女優コリンヌ・リュシュールとジブチの売春婦の関係（謎）を追いかける物語である。伊達龍一郎は遠藤周作の筆名である。この作品にはフランスの微妙な問題（植民地主義と人種差別）への言及があり、遠藤はフランス留学を支援してくれた（フランスを理想化する親フランス派の）人々を付度して筆名にしたと考えられる。

この年、最大の業績は西野照太郎『鎖を断つアフリカ』の刊行である。西野自身は本書の目的を「正しいアフリカの姿を知るための入門書になるような、基本的な知識を與えること」（まえがき）と指摘した。各章のタイトルは「アジアからアフリカへ」、「南アフリカの産業革命」、「地の果ての動き」、「熱帯アフリカの光と影」、「自由世界とアフリカ」そして「アフリカ人の登場」である。本文の結語は次のように象徴的である。「黒人ナショナリズムを中心とする全アフリカの解放運動は統一戦線の方に動いている。しかし、サハラ沙漠の北と南を直接的に結びつけてこの統一戦線を實現するものは、アフリカのナショナリストのすべてが、その運動が階級闘争であることを自覺した時であろう。その時こそ、龜が兎に勝つことはアフリカ人の夢ではなくなるであろう」（199頁）。西野の視座は明確であり、将来への洞察力は驚異的である。岩波書店の新聞広告では「本書は帝国主義に抗して解放を求めるアフリカ人民の闘争を生々と描いている」と紹介された。蠟山芳郎は書評において「西野さんはこの本を「アフリカの解放に努力する人々」の動きを強調する立場から書いた、といている。私はこの立場に全く賛成だ」と絶賛した。因みに、奥付における西野本人の自己紹介は「1914年徳島縣に生まる／1937年京都大學法學部卒業／専門一植民地問題／現在一國立國會圖書館調査員／編著一「東印度工業論」」であった。京都帝國大學であったが、西野はわざわざ「帝國」を削除していたのである。

一方で、西野は他の追隨を許さぬ専門研究者であった。論文「『蕃奴』

と「黄奴」はアフリカから中国に輸出された「蕃奴」と中国からアフリカへ輸出された「黄奴」が帝国主義支配に対してスクラムを組んで闘争していることを分析した。この問題で西野の論考を越える作品はない。他方で、西野は一般雑誌に分かり易い論文（解説）を寄稿し、アフリカ問題の専門家となった。

研究者の論文としては田中直吉（近畿大学法学部教授）「アフリカ分割をめぐる國際的葛藤」および中村洸（慶應義塾大学法学部助手）「エジプトにおける駐留軍の刑事裁判管轄権について」がある。研究者が編集した一般書としては、岩田慶治（大阪市立大学文学部講師）編『アフリカの自然と生活』がある。

世界についての著書とりわけ帝国主義と民族についての概説書において、焦点はアジアに置かれ、アフリカが対象にされることは少なかった。江口朴郎『帝國主義と民族』（東京大學出版會、1954年12月）は「アジアのナショナリズム」について有意義な議論をしながらも、その延長線にある「アフリカのナショナリズム」に言及しなかった。これは江口朴郎だけでなく、当時の歴史学研究者の眼がアフリカに注がれていなかった証左である。それでも、アジアのナショナリズムがアジア・アラブのナショナリズムに拡大しつつあることは辛うじて言及された。小山弘健「民族運動と植民地革命」（労働問題研究所編『政治経済基礎講座 第2巻 帝国主義と民族問題』岩崎書店、1954年7月）は第二次世界大戦後の民族解放運動がアジアからアラブへ拡大しつつあることを指摘し、「エジプト・モロッコ・チュニス等の諸国」で民族的意識が高まっていることに言及した（152頁）。

世界各国便覧『世界めぐり』において、林寿郎はアフリカ6カ国を紹介した。その緒言は次のとおりである。「アフリカといえば、みなさんはさばくと密林の熱帯で、悪い病気や猛獣がはびこり、まったく未開の地だと思ってしまう。ところが、じっさいには赤道直下に雪のふる高山もあれば、…りっぱな近代都市もあるのです」（57頁）。アフリカ9カ国を旅行した

ジョン・ガンサー（アメリカ人ジャーナリスト：「内幕もの」で有名）は「白人はアフリカから追われるか？」において民族主義の台頭と自治独立の動きを紹介しながら、「共産主義者が民族主義運動を横取り」（59頁）する危険性を指摘した。

「未知の大陸」アフリカの最新の動向については、文字媒体からの理解だけでは限界があった。その点で、写真雑誌の果たした役割は大きかった。『アサヒグラフ』に掲載された「建国一年半」はエジプトのナギブ独裁政権について、「アフリカの反英テロ」はケニアのマウマウ運動について、「アルジェリアの反乱」は11月の反乱について、活写された写真（外国通信社提供）によって読者は事態を容易に理解できるようになった。

自治から独立へ、アフリカの民族解放運動の動向が個々具体的に紹介された。サラ・ベン・ユーゼフ「わが反植民地闘争」はチュニジアの独立への動きに理解を求めた。ジョン・ガンサー「対照の国——ニジェリア」は英国が独立運動を押しとどめることができないと指摘した。小林「ゴールド・コーストをめぐる諸問題」は「政治的には黒人政府を持ち、いよいよ完全自治にあと一步まできている」と描写した。大森貝介の傑作「マウマウ團の支那將軍」は、「ケニヤ山の殺人鬼」と恐れられたマウマウ戦士（副頭目）、ジェネラル・チャイナ（ワルヒウ・イトーテ）が拘束され当局とマウマウとの交渉役にさせられた経緯を詳細に記述した。綿密な情報収集を遂行した（と推測される）、見事な内容である。この論文は大森貝介『エヴェレストより高い山』（近代社、1956年7月）に再録された。